

複式 国語科 3・4年F組	戦後60年～作者の思い・願いに寄り添いながら～ 3年：あまんきみこ作『ちいちゃんのかげおくり』 4年：今西祐行作『一つの花』	西村充司
---------------------	--	------

1. 単元について

(1) 単元設定の理由

①作者の思い・願いに触れて

今夏、全国国語教育研究大会において、『ちいちゃんのかげおくり』の作者あまんきみこさんのお話を聞く機会を得た。「喜びも悲しみも、みんな刻んで年輪のように生きている。」とおっしゃるあまんさんは、幼いころを日本人ばかりの旧満州で過ごされた。そうして、「家族や学校のある自分の場所は陽の当たる場所」としながら、「自分の影がよその人にあたって、よその人の日なたをうばってしまった。自分が楽しい場所にいるとき、誰かが陽の当たらない場所にいる。」を意識され、「自分が日なたを歩くとき、自分の影がどこにあるのか。」を今も常々考えておられるということであった。作品にも滲み出るそんなあまんさんのやさしいまなざしに触れながらも、「戦(いくさ)は起こしてはいけないもの。殺すから殺される。両方に理由ができてしまう。決して戦争の幕をおろしてはいけない。」という言葉、また、「力のないものが犠牲になりながら今の生命がある。」という思いには、あまんさんの作者としての強い意志を感じた。そんな思いをしずしずと語られながら、「自分の声でないものは書き上げられない。作品にならない。自分の中にあるものしか書けない。自分の中から湧き出るものだけしか書けない。」との付け加えは、まさにその強い意志の証であると感じた。

「このことを書きたい。表現がしっくりいくように何度も何度も書いたり、消したり」するあまんさんに、「血の出るような文字ではありませんか。」と話されたという今西祐行さんも、血の出るような文字で作品に生命を吹き込んだはずである。2004年末に亡くなられた今西さんの生きた声は、『一つの花』からも力強く聞こえてくる。

②「意味と内容」のひろがる学び

本単元の指導にあたって、場面の移り変わりや登場人物の様子、また心情に関わった話し合いは大切にしたい。しかし、本教材での大切なねらいはその先にある。“戦争がもたらした人々の生活・生命の現実、そして戦時下を生きた人々の思い、とりわけ家族の願い”を感じ取り、また、作者の思いや願いについても考え寄り添っていくことで、今を、そして未来を生きる子どもたちには、戦争や平和に対しての自分自身の願いや思いを深めて欲しいと期待した。

本単元における「意味のひろがり」は、そんな作者の思いや願いにどれだけ寄り添え、自分自身の思いや願いをどれだけ強め、深められるかにあると考えた。また、「内容のひろがり」として、教材文やそれぞれの思いの語りに取り組んだ。これまでの音読とはひと味違い、作品そのものを自分のものとした上で、学び合ったことを生かしながら、場や相手意識をもち、そして何より平和への願いを強くもって、じっくりと作品世界を語り上げて欲しい。語り継ごうという意識をはっきりもって取り組めたとき、真の「意味と内容のひろがる学び」が創造できたといえる。

③「書くこと」でより生きる～「読むこと」「聞くこと・話すこと」・複式の学び～

「初発の感想」・一人学習での「書き込み」・授業の終わりで「読みの深まり・ひろがり」ふりかえりカードなど、本単元でも、「書くこと」を授業の中に多く取り入れるよう計画した。

初発の感想は、自分たちの学習課題の設定に役立てた。自分たちの疑問であり、勉強していききたいことであるからこそ、子どもたちは主体的に学習に向かうことができる。

一人学習として「書き込み」を行っていることで、ある程度自信をもって子どもたちが積極的に発言できるし、要点を整理しながら伝えることもできる。また、同じ教材・同じ場面について子どもたちのレディネスが整っていることで、比較して聞き易く、「付け足しで」「似ていて」「少し違って」などの関連した意見がつながり、複式の同時間接指導においても、子どもたちの総合力によりかなり読みを深めることができると考えた。

「読みの深まり・ひろがり」ふりかえりカードには、その時間の学習での新たな自分の気づきや思い・考えに加え、心にひびいた友達の考えと、それを自分はどう取り入れたかも書く。少ない人数だからこそ一人一人の意見を大切にしたいし、そうした相互作用による自分自身の変容・高まりを少しでも意識できることが学ぶよろこびにつながると考えたからである。そうしてもちろん、「まなざしの共鳴」がおこる学習文化の創造に、より良い影響をもたらすとも期待した。

(2) 4年生：本時の学びから

書き込みノートの様子からも懸念していた通り、子どもたちが中心課題とした『あわてて帰ってきたお父さんの手には、一輪のコスモスの花がありました。「ゆみ、さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだようー。』』においては、コスモスの状況や性質を踏まえての発言はやはりなかなか出てこなかった。

そこでコスモスの様子についての発言を求めた際、コスモスを擬人化してその思いを考えてもらおうとしたわけでもなかったが、発問が曖昧であったせいか話し合いがそこで続いてしまうことになった。ただ、「ひとりぼっちでも咲いている」といった趣旨の発言があり、それを生かして、コスモスの状況をも考えながらのお父さんの思いについて考えることへはつなげることができた。その結果、「勇気をもって生きてほしい」というお父さんの願いを引き出すことができた。

KH君のふりかえりカードには、この時間の4年生の学びの様相が凝縮している。

【はじめは「コスモスの花をお父さんだと思ってほしいな。」だったけど、…(中略)…さみしさに負けることなく咲いているということと同じように、ゆみ子も一人ぼっちでみんなにみすてられても勇気をもってほしい。…】と、コスモスの花に込めたお父さんの思いについての、本時におけるこの子の変容がはっきりと示されている。さらに、【…前ゆいちゃんが「なんでおにぎりでは一つだけというのに、コスモスの花ならキツキツと足をばたつかせたのかな。」といったのが今わかりました。おにぎりはゆみ子に気持ちをこめないであげているけど、(コスモスの)花は勇気があっていさましいからそう思いました。…】と、仲間に共鳴していた前時までの疑問についても、自分なりの考えをもてたことが記されている。学習場面でのコスモスの花の「意味のひろがり」を、他の場面にも生かしおにぎりと比較して考えることができたことは「内容のひろがり」であり、それによりコスモスの花のさらなる「意味のひろがり」があったといえよう。

3. 成果と課題

いずれの学年も8人という少人数で同時間接の学習を効果的に進めるためには、子どもたち一人一人が自分の考えをしっかりと持ち、積極的に伝え合うことが不可欠である。また、一人一人の考えを大切に、関連した意見がつながってこそ子どもたちは読みを深めることができる。

本時においても、仲間の意見の良さに目を向けそれを自分に取り込みながらさらに考え深め合う、いわば「まなざしの共鳴により意味と内容をひろげていく」子どもたちの主体的な学びの姿は、たくさんの参会者から高い評価を得た。これら学習の基盤を構築し、意識を高めるためには、「書き込みノート」や「読みの深まり・ひろがり」ふりかえりカードなど、継続的螺旋的な「書くこと」による効果が大きい。そんな中、子どもたち自身がその時間での自分の変容・高まりを意識できたし、それは次時以降の学ぶ意欲につながったと考える。また、指導者にとっても、一連の「書くこと」から、子どもたち一人一人の、また学習集団それぞれの、成長と課題を確実に評価することができた。その上で、実態にあった単元あるいは個人の目標をもつことができたし、単元構成や授業構想を練る際には、具体的な発問にまで至って指導に生かすことができた。

最後の場面の学習の後、作者の願いについて話し合った。「戦争によりたくさんの人が死んでしまう現実。だからこそその怖さ・恐ろしさ。そんな中で生きていくことの大変さ・つらさ。家族と別れることの悲しさ・さびしさ。そうして、今は平和だよ。」など、作者の主張として感じ取ったことがまず出された。その上で、「戦争をやめて。戦争をしないで。家族を大切に。一日一日を大切に。わざと死なないで。命を大切に。今の平和を守って。いって。」など、戦後60年、作者の思い・願いに寄り添えたと感じる声が次々と子どもたちの心から飛び出した。それとともに、「作者はそのことを読む人に伝えたい。だからこうして書き残している。」とも。

子どもたちは、そんな願いを受けつぎ、それぞれの作品を複式集会で、1・2Fや5・6Fの仲間たちに読み語った。真剣に練習し、作者の願いを自分の心からの願いとして語り伝えられたことに、本単元における学びの「意味と内容」のひろがりが感じられた。

こうした語りや群読はビデオに撮って貯めている。これら学びの足跡は、DVDとして子どもたちの宝物となり、受けついで思いや願いもそこに刻まれ残っていく。

今後は、それぞれの学年内にとどまらず、複式特性を生かすためにも、両学年の学びのより効果的な相互作用、学年交流による「意味と内容」のひろがりを今以上に多く視野に入れた研究と実践に努めていきたい。